

二〇一九年一月一日をもって、新潟は開港一五〇年を迎えました。この一五〇年のなかで、新潟ではさまざまな出来事がおこり、そのなかで人々はときに時代に翻弄されながらも、港と深い関わりをもってたくましく生きてきました。新潟の人々にとって、「新潟開港」は近代化していく過程での出発点でもあり、その後の節目節目で祝い、振り返りつつ現状を見つめ直す機会としてきました。開港大博覧会や開港記念祭といった催事は、新潟の人々の心の中に脈打つ「港」、そして「新潟開港」への想いから生まれたのでしよう。

■安政の五カ国条約と新潟港の実情

新潟が開港場に選定されたのは、安政五（一八五八）年に結ばれた五カ国条約においてでした。神奈川（横浜）・箱館（函館）・長崎・兵庫（神戸）ともに、いわゆる開港五港の一つとして選定されました。実は、新潟開港については仮の決定で、日本海側で新潟以外の良港があれば、その場所を開港場とする約束でした。当時の新潟は日本海側有数の大きな港町でしたが、港は水深が浅く冬季の風波が激しく、大型船の入港・停泊が難しい港でした。

そのため外国人からは不評で、一応の開港期日が設けられましたが、外国とは再度交渉を踏まえてからの正式決定となる取り決めになっていました。

■新潟開港

安政の五カ国条約での新潟開港の期日は、当初安政六年十二月九日でしたが、国内の政情不安や戊辰戦争が勃発したことからの延期され、最終的に明治元年十一月十九日（一八六九年一月一日）に、佐渡の夷港を補助港とするこゝとで開港しました。開港に当たって、関税業務が発生することから、明治二年に運上所（のち明治六年に新潟税関に改称）が建設されました。この建物は、日本の伝統的な建築技術を用いて建てられた洋風の建物であることから擬洋風建築と呼ばれています。町はずれのまだ人家も少なかった場所に堂々たる運上所の建物が現れ、当時の新潟の人々は驚くとともに、新しい時代の到来を感じたことでしょう。

■開化政策の中の新潟

越後での戊辰戦争終結後、あいついで発生する一揆や騒動を鎮圧し、新潟開港を軌道に乗せるため、政府から派遣された人物が楠本正隆県令でした。彼は新潟県政の整備や新潟町の開化を

断行し、近代化の先鞭をつけました。開港場として外国人が見ても恥ずかしくない町とするため、街灯や町並みを整備したり、日本最初の公園の一つとして新潟遊園（のちの白山公園）の開設に着手したりしました。また、商業について株仲間を廃止して自由に営業するよう命じ、会社の設立も促しました。学校や病院といった新しい時代の建物が造られ、開港前と比べて町の様相は大きな変化を見せました。

■未来の町の姿

開港場となり楠本正隆による開化政策のもと、新潟町は変わっていきまゝす。楠本が去った一〇年後の明治十八年発行の絵入新潟新聞の表紙の絵は、新潟の町中の特徴ある建物が選んで描かれていたのです。これが、これだけでなく開港直後の新潟町の様子とは大きく変わったことが伝わりま



明治18年発行「絵入新潟新聞」(新潟ハイカラ文庫蔵)

若崎 敦朗



「東北日報」明治25年1月5日号付録「望遠鏡ニテ将来ノ新潟ヲ望ム図」(新潟ハイカラ文庫蔵)

す。さらに東北日報の明治二十五年一月五日号付録「望遠鏡ニテ将来ノ新潟ヲ望ム図」を見ると、萬代橋は木製のままですが、いづれ町並みは洋風になるだろうと予想し描かれています。我々が生活している現代の新潟の姿は、当時を生きている人々の想像をはるかにしのぐものとなっていることでしょう。開港二〇〇年・二一五〇年・三〇〇年後の新潟はどのような姿になっているのでしょうか。

本展覧会では、幕府領となった新潟上知から明治期を中心に新潟の町の様子や変化がわかる資料を展示紹介します。一五〇年前の新潟の姿と人々の想いや営みの一端を本展覧会で知っていただけたら幸いです。

(わかさき あつろう 学芸員)

館長日記

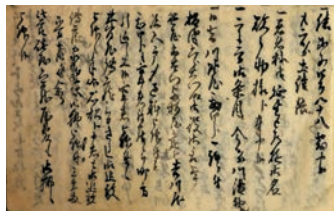
新潟市歴史博物館 館長 伊東 祐之

古文書を読む

私は当館で中級古文書演習をやっています。昨年度の後期に「万控」という当館所蔵の新潟町会所文書の一点を、受講生のみなさんと読みました。

この文書は、新潟町会所の普請方であった早川五郎兵衛が、寛政六（一七九四）年から十一年まで、仕事や事件、伝聞などをメモした手帳のような文書です。早川の孫の清作も著作に引用していますし、昭和九年刊行の『新潟市史』にも、湊祭の昼祭の開始など、この文書を典拠にした記事があります。ただし、字が下手で誤字も多く、難解なためか、全体の解説はなく、部分的にしか利用されてこなかったようです。

正月早々に堀を浚っていることや毎年白山浦の制水杭を修復していること、建物の土台替えがあることなども記されています。町奉行との儀礼や町会所の行事などの記載もあり、興味深い記載が満載です。それらの中に、寛政八年に「川野屋勘四郎一件」の処罰が記載されています。勘四郎は引



「万控」川野屋一件の記載

回しのうえ牟舎、井筒屋は追放、財産没収、碓屋も財産没収、ほか三人が戸メ過料、町老の一人が罷免されています。大事件ですが、従来、この事件は知られていません。

新潟町関係の文書は町会所の選別された記録だけがわずかに残存しているだけです。この文書には、この時期に寺や町役人がたびたび処罰されている記事があります。新潟町に何か起きていたのでは、と想像させます。

こういう事実を知ると、他の資料の読み方が変わります。今まで何気なく読んでいた資料にもヒントがあるかもしれません。他の地域の文書に何か書いてあるかもしれません。こうしてまた古文書を読む楽しみが広がっていくので

収蔵資料紹介

行田魁庵「白梅図」

毎年二、三ころには白梅が、みなとびあでも庭園の片隅でいち早く春を知らせてくれます。

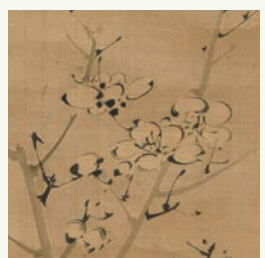
この白梅図を描いたのは、画家で新潟古町神明宮の神官でもあった行田魁庵（一八一二〜七四）です。親族にあたる三条の行田雲涛に画を学び、彼の勧めでその師であった京都の山本梅逸に入門しました。「魁庵」の号は梅逸から授かったといわれています。画業を修めた魁庵は嘉永四（一八五二）年三九歳で帰郷しました。

本図には「嘉永辛亥春日」と年記があり、魁庵が帰郷した年のちようど春に描かれたことがわかります。背景には丁寧に薄墨を刷き、花だけ色を塗らないことで、白梅の白さを表しています。この画は、当時新潟奉行を務めていた川村修就が求めたのか、代々川村家に所蔵され、いまに伝わりました。全体としてだいたいが傷みがありますが、それは好んでよく使われていたためかもしれません。

翌嘉永五年には、修就の日記に魁庵が登場します。四月二十四日条に「自分肖像出来新潟神明主行田和泉画之」とあり、修就の肖像画を魁庵が描いたことが



(中村 里那 学芸員)



記されています（「日新録書抜 二」当館所蔵）。修就はこの年の七月に堺奉行に任じられ、十月には新潟を離れました。川村家に伝えられた魁庵の白梅図は、ほとんど入れ違いとなった二人の交際を示す数少ない現存資料の一つです。

六月末まで常設展示室にて公開していますので、ぜひこの機に実物をご覧になってください。また、企画展「新潟市の文化財」（六月十六日）では、魁庵が明治四年に描いた「新潟入船之図」を展示しています。翌明治五年に新潟県令として着任した楠本正隆にはばかり、魁庵は名・正隆を正泰に改名します。幕末と明治、それぞれにおける新潟の為政者とのかわりを考えながら、魁庵の作品を眺めてみるのも一興です。